

令和元年6月24日現在

機関番号：21401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16704

研究課題名(和文) 日記を活用した後期キェルケゴール思想の研究

研究課題名(英文) A Study of Kierkegaard in his Late Period using his Journals and Notebooks

研究代表者

鈴木 祐丞 (Suzuki, Yusuke)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・助教

研究者番号：90749623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日記を活用した後期キェルケゴール思想の研究を行い、以下の成果を得た。

- (1) 日記を活用したキェルケゴール研究という方法論を構築するとともに、その普及に努めた。
- (2) 後期キェルケゴール(1848年から1852年)の著作活動において中心的役割を果たす『死に至る病』と『キリスト教の修練』について、この時期の日記の記述を手がかりに、その執筆と刊行の意味を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのキェルケゴール研究においては、(仮名)著作の思想ばかりがクローズアップされてきたが、彼の日記に定位することにより、彼にとって最重要であった彼自身の信仰のあり方との関係性で、彼の著作活動の全体を理解するという、新しいキェルケゴール理解のための道が示されることとなった。例えば彼の主著『死に至る病』の執筆・刊行は、彼にとって自らの信仰を賭けた戦いという意味合いを持つことが理解されることとなった。

研究成果の概要(英文)：I have done research on Kierkegaard in his late period using his journals and notebooks, and got the following results.

(1) I have developed a methodology of journals-based Kierkegaard study, and tried to popularized it.

(2) I have elucidated the true motive of Kierkegaard's writing and publishing "The Sickness unto Death" and "Practice in Christianity," which play the central roles in his authorship from 1848 to 1852, with his journals in this period as a clue.

研究分野：実存主義、キェルケゴール研究

キーワード：キェルケゴール 実存主義 キリスト教 デンマーク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

デンマークの思想家セレン・キェルケゴール (1813 年 - 1855 年) は、『あれか、これか』、『死に至る病』などの著作の執筆と並行して、最晩年にいたるまで断続的に日記をつけた。キェルケゴールの日記は、量的にも質的にも相当な重要性を有すると思われるものの、遺稿編集者の恣意的な編集・出版方法などを一因として、研究資料とするに値するだけの信頼性を持たないという評価が長らく定着してきた。これまで研究者は、彼の (とくに美的) 著作の思想を最重視する傾向にあったのであり、日記は伝記の作成や著作の解釈の補助的資料として使われるのが関の山であった。

ところで、キェルケゴールという人にとっての最大の関心事は、当然にも、彼自身が信仰を生きるということだったはずである。そして彼は自らの信仰を、神が自分に与えた天命に忠実に生きること、具体的には作家として読者をキリスト教へ導くことのうちに見出した。そしてじつは、こうした彼自身の信仰のあり方やそれについての考察は、彼の著作のうちにはほとんど描き出されておらず、日記のうちにこそ、彼の著作活動についての考察と緊密に連動する形で、描き出されているのである。

それゆえ、キェルケゴールの思想の全体像を把握するためには、まず彼の生全体の記録とも言うべき彼の日記を読み解き、彼が自らの信仰のあり方との関係でどのように著作活動を展開させようとしていたか把握すべきであり、そしてその上で、それぞれの著作の内容の理解へと進むべきなのである。

1990 年代後半から、キェルケゴールが遺したままの状態の復元を目指すことを編集指針とする、最新版のデンマーク語原典全集 (*Søren Kierkegaards Skrifter (SKS)*) の刊行が始まり、2013 年に日記を含む全巻の刊行が終了した。これにより、研究資料としての日記の信頼性にまつわる問題は解決を見たと言える。ここに、上述の、日記を活用したキェルケゴール研究を進める準備が整うに至った。

2. 研究の目的

本研究では、上述のような全体的研究構想のもと、ひとまず、キェルケゴール思想における空白期間とされる、1848 年から晩年のいわゆる教会闘争より前の時期、すなわち後期キェルケゴールに焦点を絞り、この時期の彼の思想の研究を行う。

3. 研究の方法

まず、最新版の原典全集 (*Søren Kierkegaards Skrifter (SKS)*) を用いて、1848 年以降のキェルケゴールの日記の読解を進めた。具体的には、1847 年 12 月 28 日付で記入が開始されている彼の日記帳 NB4 から、1852 年 6 月ころまでに書き終えられた日記帳 NB25 までを研究対象に、日記の邦訳を進めつつ、この時期の彼の信仰のあり方について、またそれと著作活動との関係性について、解釈を試みた。

また、そこで得られた知見を、ガルフにより作成された詳細を極めるキェルケゴールの伝記 (*J. Garff, SAK. Søren Aabye Kierkegaard, En Biografi, København: G. E. C. Gads Forlag, 2000*)、キアムセにより編まれたキェルケゴールの同時代人たちによる彼についての証言録 (*B. H. Kirmmse, Encounters with Kierkegaard, Princeton: Princeton University Press, 1998*) などの先行諸研究と突き合わせ、キェルケゴールという人物の生をより立体的に捉えることを試みた。

その上で、この時期にキェルケゴールが執筆・刊行した著作の中でも、後期キェルケゴールの著作活動において中心的役割を果たしていると考えられる、『死に至る病』(1848 年 1 月から 5 月に執筆、1849 年 7 月に刊行) と『キリスト教の修練』(1848 年 4 月から 11 月に執筆、1850 年 9 月に執筆) について、キェルケゴールがそれらを執筆・刊行することにどのような意味があったか、考察した。

4. 研究成果

まず、本研究の支柱となっている、上述の、日記を活用したキェルケゴール研究という方法論について、研究者向けにその意義を論じるとともに (雑誌論文「日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について」、および学会発表「キェルケゴール研究のこれまでとこれから」)、広く一般の方々に向けてもその解説を行った (図書『キェルケゴールの日記 哲学と信仰のあいだ』、とくにその巻末「試論 新しいキェルケゴール理解へ」)。また、2018 年 6 月には、キェルケゴール協会主催の第 1 回キェルケゴール・セミナーにおいて、拙編訳『キェルケゴールの日記 哲学と信仰のあいだ』の合評会を行い、本研究の方法論の妥当性をめぐって、専門の研究者たちと議論を交わした。さらに、日記を活用したキェルケゴールの伝記的研究で知られるガルフが、キェルケゴールの日記と著作のアイデンティティについての自らの見解 (キェルケゴールによる「仮名の自伝著述」としての日記と著作、という考え) を述べた論文を邦訳し、発表した (雑誌論文「私は何を見つけたのか? 私の「私」ではなかった」

キェルケゴールの日記と、仮名の自伝著述について)。近年、日本のとくに若手のキェルケゴール研究者の多くが、キェルケゴールの日記を何らかの仕方ですら研究の中に組み込むようになってきており、こうした傾向に対しては本研究がいくらかの寄与をしたのではないかと考えられる。

次に、後期キェルケゴールの著作活動の中核的テーゼ（理想的キリスト者像を前にしての絶望・罪の自己認識から、キリストによる贖罪と罪の赦しという恩寵の信仰へ）がまとめられている『死に至る病』と『キリスト教の修練』について、これらの書を、この時期の日記においてキェルケゴールが展開している、自らの信仰のあり方についての考察、それと密接にかかわる著作活動のあり方についての考察との関係のなかで理解する試みを行い、次のような成果を得た。まず、読者に対して理想的キリスト者像を突きつける『死に至る病』およびその後編とされる『キリスト教の修練』を通じて、キェルケゴールは、キリストの贖罪と罪の赦しという恩寵の真意を読者に実存的に理解させようとしていること、だが彼自身はあくまで宗教的詩人という立場にとどまって、こうした著作を操ろうとしていることが明らかとなった。そして、これらの著作は、非実存的なキリスト教へと堕ちつつあった同時代のデンマーク国教会が説くキリスト教に対する批判を表裏一体のものとして含むがゆえ、これらの著作の出版は、デンマーク国教会という当時のデンマークの最大の権威からの弾圧を招きうるものであり、にもかかわらずあえてそれらを出版するという行為は、著作活動を通じて読者を真なるキリスト教へ導き入れることに天命を見出すキェルケゴールにとって、自らの信仰の表現とも言えるものであったことが明らかとなった（図書『死に至る病』、訳者解説、および雑誌論文「なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか、あるいは、『死に至る病』の出版にこめられた意味 NB6 から NB11 を読む」）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 鈴木祐丞、「なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか、あるいは、『死に至る病』の出版にこめられた意味 NB6 から NB11 を読む」、『新キェルケゴール研究』、査読有、第16号、2018年、19-37頁。
- (2) ヨーキム・ガルフ(鈴木祐丞訳)、「私は何を見つけたのか？ 私の「私」ではなかった」キェルケゴールの日記と、仮名の自伝著述について」、『新キェルケゴール研究』、査読有、第15号、2017年、66-87頁。
- (3) 鈴木祐丞、「日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について」、『新キェルケゴール研究』、査読有、第14号、2015年、39-50頁。

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 鈴木祐丞、「なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか、あるいは、『死に至る病』の出版にこめられた意味 NB6 から NB11 を読む」、『キェルケゴール協会第18回学術大会、2017年7月、京都女子大学。
- (2) 鈴木祐丞、「キェルケゴール研究のこれまでとこれから」、『筑波大学哲学・思想学会第37回大会、2016年10月、筑波大学。

〔図書〕(計2件)

- (1) セーレン・キェルケゴール(鈴木祐丞訳)、『死に至る病』、講談社、2017年、291頁。
- (2) セーレン・キェルケゴール(鈴木祐丞編訳)、『キェルケゴールの日記 哲学と信仰のあいだ』、講談社、2016年、283頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 祐丞 (SUZUKI YUSUKE)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・助教

研究者番号：90749623

(2) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(3) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。